

みやぎ・木になる職人紀行ルート



小さな島国・日本、その北に位置する東北地方の一角にある宮城県、72 万平方キロメートルの小さな県の中にあっても、気候や風土が北と南、東と西で異なります。そこには地域の特性や土地柄に育まれてきた生業があり、その土地や人に魅せられて住み着いて秀でた技術を磨かれた人も少なくありません。そんな宮城県の各地で暮らす、特に木との関わりが深い職人気質の人々に巡り会う旅に出ることといたします。

再び「絆」(つながる)に思いを馳せて

あの未曾有の東日本大震災によって、私たちはかけがえのない多くの人命や美しいふるさと、原風景などを瞬時にして失ってしまいました。その一方で、内外からの温かい支援を受け、家族の絆や人とのつながりの大切さ、普段の当たり前の生活の有り難さなどを気づかせてくれました。あれから10年近くが経過した今、今度は新型コロナウイルスという脅威に全世界が襲われ、国と国のつながりは遮断され、人と人との距離を置かなければならない、集まれないことで、再び絆(きずな)やつながることへの渇望を抱いている状況にあります。

さて、絆(きずな)の語源を解いてみると、馬や牛などの動物を木に繋ぐ綱という意味で使われていた「木綱」(きづな)が変化して「きずな」になったと言われています。ここで「木」につながることができました。当協会では、林業普及事業の一環として「木育」を取り上げ、平成29年度から令和元年度の3カ年にわたり、特に次代を担う子どもたちを対象にして、木造校舎等における県産材(木材)の象徴的内装・外構利用状況、学校施設(運営)サイド、利用者サイドの木造施設や木に対する感想、当該施設で学び遊ぶ子どもたちへの反響や、「木育」に取り組む団体や幼児教育機関の活動状況などを把握し、PR冊子「木育の扉」を発行してまいりました。

本年度は「木育」を広義の生涯教育として捉え、豊かな自然(森林)を営み、その恵み(木)を巧みに生かす技や知恵を受け継いできた生業・人に焦点を当て、「人と木(森林)」とのつながりや生き方、木(森林)への思いなどを、彼らとの出会い旅・紀行文風にまとめました。世代を超えて幅広く、木(森林)の良さ、大切さ、人々(の生活)と木の関わりなどを周知するとともに、次代を担う子どもたちには木と関わる生業への興味と関心を持たせ、ひいてはSDGs(持続可能な開発目標)の実現に向けたヒントや絆「つながり」の大切さにもあらためて気づいていただければ幸いです。

令和2年12月



宫城県林業振興協会 会長 佐藤 久一郎

[目 次

巻	頭 言 ~再び「絆」(つながる)に思いを馳せて~	
1.	木の温もりを伝えたい (組み木細工職人 福島俊夫さん)	1
	山間の風景点描 春の川縁とスギ木立	
2.	十本十色の木々 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	7
	山間の風景点描 新緑とスギ丸太	
3.	可能性を秘めた木炭	13
	山間の風景点描 土蔵とスギ木立	
4.	木と戯れて (こけし工人 新山真由美さん)	19
	山間の風景点描 田んぼとスギ木立	
5.	木を見れる、木を使える (棟梁(大工職人) 佐藤良昭さん)	25
	山間の風景点描 スズメバチの巣とスギ木立	
掲載	関内容に関する留意事項	
举	末 宣 ~取材を終えて(フェイス トウ フェイス)~	

1. 木の温もりを伝えたい

組み木細工職人 福島 俊夫さん

ここは、加美町の中羽前街道(国道 457 号)から少し脇に入った田園風景に囲まれた長閑な町外れの一角。小川も流れています。今日の主人公である福島俊夫さんが開いた工房があります。奥様の京子さんもご一緒されて出迎えてくれました。作品の展示室を兼ねたサロン部屋



一際目を引く工房の看板

に案内されると、そこで溢れんばかりの作品が再び出迎えてくれて、温もりと暖かな雰囲気を 醸し出す空間でした。「組み木工房・木の実」をオープンして既に 12 年を迎えたそうです。

子どもたちの喜ぶ顔が…

俊夫さんは、実は中学校の教師をされていた方で定年を 機に工房を建てたという、長年の夢、念願を叶えた方です。 「家内がいるお陰で組み木が作れます。女性の目線でアイデ アを出してくれます。」とのコメントに、傍らにいた京子さん がニンマリ微笑みます。内助の功なくして今の俊夫さんはな いようです。幼い頃からモノづくりが大好きで、父親が大工



糸鋸盤に向かう俊夫さん

であったこともあり、 小学生の頃から丸 太を伐ったり、木工 品を作ったり、電気



自作の組み木を持つ俊夫さん

工作や植物を育てることも好きな少年時代が、今の仕事のベースになっているそうです。教員生活では特殊学級の授業で、子どもたちに組み木のパズルをさせたところ、大変喜んでくれて彼らの笑顔を見て自分も嬉

しくなり、それが木工に嵌まっていったきっかけになりました。

これまでに1,000点以上の組み木作品を手掛けてきました。木工には家具から食器類の製作、一刀彫り、くり抜きなどのジャンルがある中で、敢えて組み木細工に嵌まった理由は、その繊細で緻密なデザイン性、細かい部品を作っていく面白さにあるそうです。それは自身の性格によるところが大きいそうです。作品の題材は寄り添うペアものから、四季折々の風物詩、ひな祭りや端午の節句、クリスマスなどの歳時記、童話、お伽噺などのほかに、最近のお気に入り作品は豚や牛の肉の部位、野菜詰め合わせだそうです。そして今、製作途上にある干支は力作中の力作だそうです。干支の動物を取り出して連結させることが出来るという凄技の作品でした。



お気に入り・肉の部位



力作中の力作・干支

作品が人と人をつなぐ

作品一つ一つには思い出が詰め込まれています。使う 木の種類によって同じデザインでも違う、一つ一つ同じモ ノは作れないそうです。また、その時の感情が作品に表 れてしまい、糸鋸の線の勢いが途切れてしまうことがあ る。そんなときは、自分の機嫌が悪かったり気分が乗ら なかったりしているのです。自分の思いを形にしてその作 品を手にしたお客さんが喜んでくれる、わざわざ御礼の 手紙やお土産まで届けてくれる、人から人へ作品の評判 が伝わり、思わぬ方から注文を受け取ることがあるそう です。遠方から我が家に訪れてくる人も少なくありません。 「家族の思い出や亡き愛犬、愛車のバイク、経営している りんご園のリンゴをモチーフにした組み木を作っていただ きたい。」等など、様々な注文が舞い込んできます。そん な作品を待ちわびている人がいること、期待に添えるよ



注文された愛車バイク



豪華絢爛ひな人形

う写真を見ながら、時には現物に近いモノを見に行ったりしながらデザインを決めて作品を見事 完成させたときの喜びは、俊夫さんにとって、かけがえのない仕事のやり甲斐です。作品を通して人と人がつながっていく、広がっていくことも嬉しいそうです。自身が教師であったことで 教育関係者との親交はあったものの、この仕事を始めてからそうした身内の人以外、ジャンルの違う仕事をされている人と出会えたこと、そして様々な趣味を持っている手作り好きな人が訪れてくれて自慢の作品を置かれていく、全国津々浦々の人々とつながりができたそうです。

木の質感が人肌にフィット

組み木細工の材料は広葉樹材で、材の木目、堅さ、質感を重視しているそうです。主にブナ、ヤマザクラ、イヌエンジュ、ケヤキ、ミズキ、センノキを使いますが、紫檀や黒檀、鉄刀木といった高級木材も使います。これらの木材は人から譲り受けたり、若い頃から趣味で集めていたもの、さらには地元の製材所から調達しています。材料は沢山あり、そうした数ある材料の中から、作品の



様々な樹種の板材をストック

用途や注文によって使用材料を変え、例えばオモチャとして使う場合は壊れにくい堅い材を、インテリアとして使う場合は木目の美しい材を使います。俊夫さんは、木材の良さを一際感じています。あの柔らかで温かみのある質感は、人肌に一番フィットしているといいます。「木材を切り刻む音が質感を伝えてくれる、感性的に一番良い素材であり、一番身近にある自然素材である。」と、口調を強めて説明してくださいました。

様々なエピソード

俊夫さんの郷里は、南三陸町志津川戸倉です。東日本大震災では郷里の沢山の被災者が地元の中新田交流センターに避難してきました。この間、俊夫さんのサロンが彼らの憩いの場となりました。そして知人が何人も犠牲になったことが一番辛かったそうです。彼らの鎮魂を願って一心不乱になってお地蔵様の組み木を何組も作ったそ



鎮魂を願ったお地蔵様

うです。そこで気になったことが一つ。俊夫さんが実家を離れてここ加美町(旧中新田町)に居を構えた理由です。それは、俊夫さんの教員生活最初の赴任地が中新田中学校。そこで事務で働いていた奥様と出会ったことが大きなきっかけです。今でも奥様の影響力は強いそうです。

一方で、思わぬテレビ番組に出演したことで大きな反響があり、一気に工房の知名度が上がり、作品をこよなく愛してくれるファンが広がりました。民放の長寿番組「人生の楽園」です。工房を開いて2年後の2010年(平成22年)12月のことでした。その後はマスコミに幾度も取り上げられたそうです。この番組出演によって何十年ぶりで友人と再会し、お互いの消息を確認し合うことができたそうです。感無量の再会がさらに創作意欲に火を付けました。

木の文化を残したい

俊夫さんは力強く明言しました。「組み木細工だけでは生活は出来ないけれども、木の文化

を絶やさないためにも木工教室の開催などによって後継者を是非育てていきたい。」そうです。そして、自身の経験から「若い人には自分を見つめて夢に向かって前へ進んで行って欲しい、夢を抱けることは永遠の青年であること、人は必要とされてこの世に生まれてきたことを大切にしてもらいたい。」そうです。

以前、地元の高校生に森林や木の話をしたことがあるそうです。こんなに豊かに森林があっても活用されていないし、木を使っていない。コンクリートの文化から木の文化へ変えていかなければならない。地元の自然、山と川と農地がつながっていること、木の文化を残していくことの必要性などを強く訴えたそうです。「日本人は、何かを置き忘れて進んでいっているような感がしてならない。それは心や感情かも。幼い頃から森林や木に親しんでもらい、木の良さを知ってもらいたいですね。」そんな俊夫さんのメッセージがずしりと心に差し込んできました。



サロンに飾られた木組み作品



組み木パズルに集中する園児たち

木の文化を伝承する活動として、俊夫さんは京子さんと共に、自作の組み木を持参して地元の幼稚園や保育園、児童館、介護施設などに出向いて絵本を読み聞かせる活動を続けています。組み木はパズルになっていることから、子どもたちには必ず組み木で自由に遊ばせて木と触れあう場を設けて、その温もりと柔らかな肌触りを感じ取ってもらうそうです。



様々な組み木に園児たちも興味津々

夫唱婦随で営む工房には、笑顔と温もりがいっぱい。作品のみならずお二人の人柄がとって も素敵でした。自然と気持ちが和らぎ、その余韻を噛みしめながら工房を後にしました。



子どもたち向けのお話会で使われる 童話の一節をモチーフにした組み木です。

さるかに合戦



四季折々の歳時記をモチーフにした組み木です。

五月人形



製作初期のモチーフであったペアシリーズの組み木です。

フクロウのつがい

山間の風景点描

春の川縁とスギ木立



川縁に菜の花が咲き誇っていた。周辺の 山々にも新緑が輝く。そんな春景色にア クセントになるのがひときわ緑濃いスギ木 立。この時期、様々な緑系のカラーが競 合して実に美しい。

2. 十本十色の木々

^{そまし} 杣師 (伐採職人) 佐々木 賢一さん

現在は市町村合併により登米市となったここ旧津山町は、町の8割が森林という環境に恵まれて、数多くの製材工場が集積し、全国でも有数の林業地として知られています。とりわけスギの生長が頗る良く、峰までスギが植林された山々は、実に緑豊かで美しい風景が広がっています。また、スギ材を利用した矢羽根細工などの木工品も有名です。そんな津山に生まれ育ったのが杣師・佐々木賢一さんです。津山のシンボルでもある「もくもくハウス」の一角で賢一さんと対面しました。

凄腕の特殊伐採請負人

仕事柄、筋肉隆々で強面の方と思いきや、実に紳士的で 実直な優しい語り口の賢一さんでした。生い立ちに始まり、



柳津虚空蔵尊境内にあるケヤキの大木。「こういう瘤があるのは、玉杢という美しい模様が材面に出るんだ。」と、賢一さんに教えていただいた。

現在の仕事を始めたきっかけなどを語ってくださいました。山に囲まれた地域で、林業に携わる人も多い環境にある中、我々団塊の世代は中学を卒業して直ぐに家業を継ぐのが当たり前で、父親は炭焼、叔父が伐採業だったことから、自然と山の仕事に従事するよ





津山を象徴する風景



津山のシンボル「もくもくハウス」内



イチョウの大木と腎一さん

うになったそうです。木を伐採する人は多いが、大木を伐る作業は 非常に特殊で殆どいません。その最たる対象木のケヤキは今や銘木 ですが、以前はそれほどではなかったそうです。ケヤキの需要が増え、 高価な木になったものの 40 年ほど前はケヤキの大木を伐る人がいませんでした。ケヤキの大木は真っ直ぐに伸びていないし、枝が大きく張り出しているので、伐るのが難しいそうです。「伐り方次第で材の価格が決まるぐらいに難しいんだよ。宮城や岩手のケヤキは品質が良いので全国から買い付けに来るんだ。ケヤキの大木だけでなく、お寺や神社の境内にある大木、庭木の大木なども手掛ける。県外にも伐りに行くよ。70 歳を過ぎても未だに仕事が舞い込むし、仕事が続けられることがいいね。しかし、後継者が育たないことが辛い。大木を伐れるような後継者が欲しいねえ。」賢一さんは希に見る大木・高木の特殊伐採(吊るし伐り)名人なのです。

安堵感と満足感に浸る

賢一さんのところには、様々な難問難題の伐採 依頼が舞い込んできます。特に大木や高木の伐 採には危険が伴いますが、出来ない仕事はない、 頼まれればどんなに危険な作業が伴ってもやり遂 げるという信念で完遂するそうです。一度だけ断っ た事例があるそうです。大木が家屋に傾き、危険 極まりない状況にある伐採でしたが、誰も出来ず にいたため一念発起して見事に伐り倒したそうで す。「頼まれ仕事といいながらも重責を感じる。命 がけの作業なので、全身全霊で作業する。伐採 作業を終えたときの安堵感は堪らないね。満足 感に浸るよ。| 作業の大変さが伝わってきました。 クレーンの先にさらに孫クレーンをアタッチさせて 高所で作業を行います。時には体に命綱を巻きク レーンで吊り上げてもらって作業することもあるそ うです。当然のことながら、作業は一人だけでは 出来ません。重機を動かしたり、地上から指示を 出す補助作業員らと一心同体で作業を行います。 「危険を伴う作業だから、彼らに対して自然と厳 しい口調になってしまうんだ。絶対に気は抜けな



参道のスギ大木の枝切り作業 (柳津虚空蔵尊・杉田史氏提供)



参道のスギ大木の枝切り作業 (柳津虚空蔵尊・杉田史氏提供)



特殊伐採に欠かせないクレーン車 (柳津虚空蔵尊・杉田史氏提供)

いからね。言葉をどうしても荒げてしまうんだよね。」それでも怪我は絶えないそうです。怪我は殆ど自身の治癒力で治すとのこと。滅多に医者に診てもらったことはないので、周囲の者から

「怪物」と言われているそうです。

木のこと、森林のこと

木材に絶えず接している賢一さんは、木のことを知り尽くし ています。「木の種類、木が持つ性質を知らない人が多いねえ。 木は人と同じように一本一本皆違うんだ。折れ易い木もあれば、 堅くて粘りのある木もある。何処にどの木を如何に使うかが大 切だね。いい木が沢山ありながら、使おうとしていない。例えば、 エンジュとかカヤ、クリなどである。木はいいんだよね。なん といっても香りだ。いい木というのは柔らかいこと、伐ったとき に良さがわかるんだ。」と、嘆く傍らで木の良さを力説してくれ ました。賢一さんは、実は地元の木工芸品事業協同組合にも 加入されて、菓子器や茶托などの器類を得意とする木工職人 でもあります。木の性質を見抜く力が備わり、立木の状態を見 ただけで伐らずともその木の良し悪しがわかるそうです。現在 は、伐採作業で忙しく木工に携えないことを悔やんでいました。 賢一さんの仕事は木を伐ることなので、保護団体や住民から 「環境破壊」だとしてクレームを付けられることもあるそうです。 「仙台市内でケヤキの大木を伐採していたら、必ずごしゃがれる (怒られる) ね。(笑い)」「林業はあくまでも産業だよね。山 の上は自然林として環境財として守り、山の下は産業として林 業を行う。そして適地適木、その土地にあった木を植えること が大切だ。伐らずに大木にしておくことは環境に良いとは思わ ない。なぜなら、大木があると周囲は陰になり草木が生えな いから、大木の根だけしか張っていない。かえって災害が起こ りやすいんだよ。| 唯々頷くばかりでした。









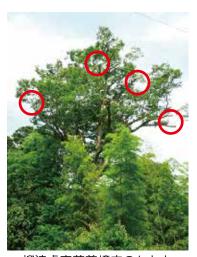
喜ぶ顔が一番

一口に言って一番良かった仕事などはないそうです。小さい仕 事だろうが大きい仕事だろうが同じ仕事であり、お金の問題で はないそうです。辛かったことは、依頼主とのトラブル。行き違 いがあったり折り合いが合わなかったりしますが、そんな時は素 直に謝ることが秘訣だそうです。「世の中に完璧な人間などいな い、過ちはあるよ。どうしても間違いはあるし、素直さが大事 だね。| と、人生経験豊かな賢一さんの言葉でした。一番辛かっ たことは愛弟子が現場で突然倒れて逝ってしまったことだそうで す。このことを話されたとき、賢一さんの目に涙が浮かんだこと が印象的でした。また、民放で朝に放映されていた人気TV番 組に杣師として生出演し紹介されたこと、秋田県で行ったケヤ キの伐採が本に掲載されたことが嬉しかったそうです。残念な ことにその本は紛失してしまったそうです。そして、ある由緒あ る家の庭に植えてあった 400 年のスギと 200 年のカヤの木を 伐採することとなり、先祖代々愛されてきた木であることから、 親戚一同が集まり、その方々が見守る中で伐採したことも大きな エピソードとして残っているそうです。「例えば、社会のために貢 献しようとか全く意識しないね。ごく自然体で仕事をこなしてい るんだ。自分が出来ることをしっかりやって、自然と相手(依頼 主)が喜んでくれる、これが何よりだよ。それが貢献というも のだよ。| こうした謙虚な気持ちにも賢一さんの姿が現れていま した。

そして、賢一さんが携わった伐採現場を案内していただきました。横山不動尊・大徳寺では、旧津山町の指定文化財になっている樹齢 400 年超のイチョウでした。樹高は 40 m以上あり本堂に倒れかけていたため、上から 3 分の1の高さで伐採したそうです。その隣にあるメタセコイアの大木も同様に伐採したそ



横山不動尊境内のメタセコイア 〇印は伐採箇所



柳津虚空蔵尊境内のケヤキ 〇印は切り落とし箇所



柳津虚空蔵尊参道のスギ 〇印は切り落とし箇所

うです。福田寺ではスギの高木が駐車場に陰を作り、冬期間 凍結状態であったことから、それを回避するためにスギを伐採、 伐採跡にはヤマザクラとモミジを植栽し、将来的には四季折々 の美しい風景を仕立てるそうです。柳津虚空蔵尊では、旧津 山町の指定文化財になっている樹齢 400 年超の樹高 40 mほ どのケヤキでした。樹冠を構成する枝先を切り落としたそうで、 このケヤキは、隣接するケヤキの伐り株が放火に遭いその貰 い火で幹の半分が焼けたため、樹勢が衰弱して枝先が枯れ始 めて落下の危険があることから、枝落としを頼まれたそうです。



杣師姿の賢一さん



見事なチェンソー捌き



木(旧津山町の指定文化財) も、枝が伸びて落下の危険があることから、枝先を落とす作業を行ったそうです。涌谷町成沢、箟岳山麓にある40~100年生のスギ人工林。約10町歩を皆伐している伐採現場です。太さや曲りなどを見極め、用途毎に伐採して採材するとのこと。その腕前も拝見させてもらいました。現場に居合わせた同僚の作業員も賢一さんのことを尊敬されていました。百発百中で思う方向へ伐倒する、チェンソーだけで殆んどの作業を行うそうです。ヘルメットに地下足袋、杣師の姿に変身し見事な機械捌きに圧倒されました。

伐倒方向は百発百中 その実直な性格と仕事に対する信念が、会話を通して伝 わってきました。地元の方々からの信頼も厚く、地元の小学校に招かれて子どもたちに自身の 仕事(杣師)を教える機会もあるそうです。全国的にもこうした特殊伐採ができる職人肌の人

また、参道沿いのスギの大

は極めて少ないといいます。あらためてその存在感、技の 凄さに触れた充実の一日でした。

因みに高度な伐採技術と長年にわたる地域林業への 貢献が認められ、賢一さんは 2015 年(平成 27 年) に 公益社団法人国土緑化推進機構が主宰する「森の名手・ 名人」に認定されています。



世間の風景点描

新緑とスギ丸太



林道沿いに伐り出されたばかりのスギ丸 太が積まれていた。資源の循環利用で 山が若返る。そして、背後の広葉樹が新 たな命を育むかのように、その新緑が鮮 やかで至極眩しく美しい。

3. 可能性を秘めた木炭

炭焼き職人 佐藤 光夫さん

七ヶ宿町は、仙台市をはじめとする県民 183 万人の 飲料水を供給する七ヶ宿ダムを擁し、「水源の郷」と も呼ばれるほど美しい水と豊かな森林に育まれた町で す。その水源地にあたる白石川源流の山間に、主人公 である佐藤光夫さんが営む工房を兼ねた住居がありま す。七ヶ宿街道(国道 113 号)からスキー場の脇道を 上っていくと舗装道路が途切れたところに工房の看板 が視界に入ってきました。野鳥が囀り、清々しい空気 と静寂に包まれた場所です。

自然に住まう

飼い犬が吠えるのに反応したのかもしれません。ご 自宅から出てこられた光夫さんは、とっても素朴で野 趣に富んだ風貌の方でした。地元の木材を自ら伐り出 して建てたという家。そして、非常に落ち着いた趣の ある居間に招かれ、しばし光夫さんと歓談することが 出来ました。光夫さんは、奥様である円さんとの結婚 を機に、七ヶ宿町に移住されました。「田畑に来る水 が山から来るんだ。」という当たり前のことに想いが行 き、そして、水を潤す大切な森林(山)の仕事に就





水を湛える七ヶ宿ダム(湖)





Charcoal-BASEの看板を持つ光夫さん

きたかったそうです。実は光夫さんは名古屋市生まれの都会っ子でしたが、中でも山容が緩やかで自然豊かな東北の山間に根を下ろせる場所を探っていたそうです。そこに七ヶ宿町で長きにわたり炭焼きをされていた名人、今は亡き佐藤石太郎さんとの運命的な出会いがありました。直感的にその石太郎さんに魅かれ、炭焼きの道に引き込まれていったそうです。1994年(平

成6年)に移住後、石太郎さんを師に仰いで窯造りから焼き方まで技術を習得し、移住後8年の歳月を掛けて専業の炭焼き職人として歩み始めました。

命を感じる

光夫さんの作る炭は石太郎さんの技を受け継いだ白炭(比較表参照)です。白炭といえばウバメガシを使って作る備長炭が有名ですが、光夫さんは、地元に生えているコナラを使います。いわゆる雑木林の主林木であり、20~30年のサイクルで伐って萌芽更新によって若返り再び

生えてくる、正に持続可

能な循環利用を炭焼き で実践されています。

光夫さんには、木に 対する様々な思いがあり ます。「木を燃やしてその 火を見つめていると、薪 がリセットされます。薪 トーブの火や焚き火な を見ていると、自然と心 が安まり、穏やかな。」 をなりませんか。」 をに、キャンプファイを自然 では皆が集まっても自然

黒炭と白炭の比較表

***XCIXVIIIXX				
	黒 炭	白 炭		
使用原木	ナラ、クヌギ、カシなど	ウバメガシ、カシ類など		
製炭方法	窯で400℃に上昇して炭化が終わり焚き口を細める。煙道を閉じ窯内を400℃から700℃に上げる。ガスを飛ばし焚き口と煙の出口を密閉、空気を遮断して消火、自然冷却。	窯で400℃に上昇して炭化が終わり焚き口を細める。徐々に開いて窯内に空気を送り込む。未炭化成分が分解しガス化、燃焼して窯内温度が一気に1,000~1,200℃まで上昇。焼き上がり速やかに窯出し、消し粉をかけて一気に消火。		
主な特徴	黒い。 火が付きやすい。 火持ちが短い。 柔らかく型崩れしやすい。	消し粉が付着して白い。 火力が強く火持ちが良い。 堅くて型崩れしにくい。 火が付きにくい。		

と静まりかえって不思議に落ち着いたかも。ふと若き頃の体験が思い起こされました。さらに「木は燃やせます。そして調理が出来ます。そして炭となります。電気やガスは便利かもしれないけど、配管や設備が必要です。木が無いと人間は暮らしていけない。木が生活の中で利用されなくなってきているのが残念です。」と語り続けました。



白炭の原木・コナラ@光夫さん宅の庭先で

摩訶不思議

窯から炭を出すときは、いつも胸が高鳴ります。い い炭ができるように窯の調子を加減する窯加減が難 しい。始めた頃は、窯のことが気になりすぎて、炭が すっかり灰になってしまった夢を見たことがあるそうで す。今では、寝ていても家の中にまで入ってきて微妙 に香る煙の匂いで、窯の中の炭化の進み具合が判断 できるくらいになりました。最初の頃は「なぜ燃やして いるのに灰にならずに炭として残るのか。」とても不思 議に感じていました。「炭は炭素だけでできている、 ということはダイヤモンドと同じモノを作っていること なんだ!| 摩訶不思議な炭にぞっこん惚れてしまった 光夫さんです。一方で辛い仕事もつきまといます。炎 天下での原木割りはさすがの光夫さんにとっても力仕 事で大変だそうです。しかし、その長年の割り作業 で体幹が鍛えられて、力を入れずに割れるようになり、 作業スピードも早くなったそうです。継続は力なりです。 そんな光夫さんの炭焼きの真髄を後日あらためて垣間 見ることが出来ました。ようやく光夫さんからメールで 「窯出しできます。」の連絡があり、現場へ駆けつけま した。敷地内の奥にある炭窯の前で、光夫さんが炭



コナラの原木割作業



頻繁に窯内を確認する



コナラ原木の枝結束作業

の原材料となるコナラの原木割り作業の真っ最中でした。炭窯は二つ あり、手前の窯の出し入れ口から燃え盛る炭が見えます。コナラの原 木は、今朝、七ヶ宿町横川の個人所有の山から立木の払い下げをし ていただき伐り出してきたばかりとのこと。樹齢は30年ほどだそうです。 使い慣らした斧で、木口を一寸とも狂わずに的中させながら割を入れ ると、幹全体に一筋の割れが入り、その割れ目に鉄の楔をこれまた使 い古した重厚な木槌を落して銜え込ませ、真っ二つに見事に割る、そ



原木割作業の七つ道具

んな一連の作業が、積まれた原木が無くなるまで続けられ、見事な割りの妙技でした。年季 の入った木槌は「アオ」と言うそうです。割り作業が終わるや否や、今度は作業場の傍らに積



竣工間近のCharcoal-BASE



小屋束壁面に書き印された支援者氏名

枝も束ねたまま炭の原料にするといいます。自宅の居間で対話された光夫さんの寡黙で静かな姿から一変して、そこには逞しく勇壮な姿がありました。作業が一段落して、窯の中の様子を見てから「まだ(炭出しには)時間がかかるので、自宅に入って待ちましょう。」ということで自宅へ移動。建設中のチャコールベース(Charcoal-BASE)は、クラウドファンディングでその建設経費を募ったそうです。光夫さんは、

まれていたコナラの枝を、針金で束ねていく作業に移

りました。手際よい無駄のない見事な括り作業です。

したが、天候に左右されずにできる施設を整備して、 燃料以外に食事や画材、染料などへの活用や、炭の 可能性を求めた様々なワークショップの場などとして利

これまでも炭や焚き火に親しむ体験活動を行ってきま

用し、正に炭の文化を発信していく施設を目指すとい

います。躯体はほぼ完成し内装などを残すだけで、多くの方々の支援を頂きやっとここまでできたと、感慨深げに語ってくれました。居間での取材中も、光夫さんは炭窯の状態を心配してか、幾度も窯のある方を見ながら落ち着かぬ様子でした。そして、徐に立ち上がり「ちょっと(窯を)見てきますので、中で待っていてください。」と、外へ足早に出て行きました。

ようやく、光夫さんから(窯出しの) ゴーサインが 出ました。出し入れ口に積んであった石を一ずつゆっ くりと取り外していくと、窯の中では炭が茜色にメラメ ラと燃え盛っていました。その出し入れ口から、先が 独特な半円形のレーキ(「カナエボリ」と言うそうです。)



窯出しから消火作業

で手前の炭を寄せ集めしながら、窯の外へと出していきます。炭からは依然と炎と火の粉が立ち上っています。そして、作業場脇に山となっている灰らしき消し粉を炭にかけます。この作業は炭の熱を下げるもので、これに使用される灰には土や炭のかけらなども混じっていて、「スバイ」と言うそうです。出来上がった炭は、いぶし銀のような美しい光沢ある輝きに満ちていて、光夫さんの思いがぎっしりと詰まっている見事な白炭でした。

燃え盛る白炭



白炭の製品

力強い信念と誇り

「炭焼きは自然の営みに即した素晴らしい仕事です。 炭には本当に素晴らしい沢山の働きや効能があって、 無限の広がりと可能性を秘めています。」 一際強い口調

となり、光夫さんの目が一段と輝きを増していました。確かに炭には脱臭効果や調湿効果、有害物質の吸着、土壌改良のほかに食べ物に混ぜて抗酸化作用や発酵促進など様々な効能があります。「こんなに素晴らしい仕事に従事する人を一人でも増やしたいのです。炭焼きを未来へ

繋いでいきたい。そして、次代の人たちが炭焼きで生計を立てられるようにしたい。」その自信に満ちた誇らしげな語り口に、光夫さんの炭焼きに対する強い信念と誇りを感じました。また、奥様の円さんも炭の効能を普及しようと炭パウダー入りのお菓子やパン作りに挑戦し、町の地場産品として道の駅やネットショップへの出品等でその知名度を上げています。光夫さんの夢はとどまることを知りません。工房「すみやのくらし」のコンセプトにある「やさしくなかよく生きるために」をさらに深めて広める取組に挑んでいます。





因みに、光夫さんはあの人気TV番組「人生の楽園」にも出演されています。2001年(平成13年)2月、まだ番組が始まって間もない第2回目あたりで放映されたそうです。また、2009年(平成21年)にはその卓越した白炭の製造が認められ、公益社団法人国土緑化推進機構が主宰する「森の名手・名人」にも認定されました。

世間の風景点描

土蔵とスギ木立



谷間の集落からさらに奥の道へ進むと、 土蔵が目に入った。由緒あるお宝が大切 に保管されているのかな。背後に聳える スギの木立の生長とともに歴史を刻み続 ける白堊の土蔵である。

4. 木と戯れて

こけし工人 新山 真由美さん

白石市の国道 4 号から県道南蔵王白石線に入り、 山間を上っていくと奥羽の薬湯として名高い鎌先温泉があります。さらに上っていくと小さな集落が現れます。 ここは蔵王連山の名峰不忘山を源とする弥次沢川の 谷間にある集落で、宮城県伝統こけし「弥治郎こけし」 の木地師が集まる弥治郎集落です。その一角に体験 資料館「弥治郎こけし村」があります。敷地内には、 木地業を司る神様を祀った神社のほかにいくつかの工 房が軒を並べ、その一つ「きぼこ」がこけし工人新山 真由美さんの工房でした。





先駆けのこけ女

工房では、ご主人の吉紀さんが轆轤で作品製作の最中でした。「作業中でうるさいと思うから、隣が空いているので、そちらで応対しなさい。」との吉紀さんの配慮で、隣の工房に案内いただきました。女性のこけし工人は、今では全国各地で活躍されている方が少なくありませんが、この世界は男社会であり先祖代々受け継がれ、伝統が重んじられている中にあって、真由美さんが工人の道に進んだ理由などをお聞きすることが出来ました。真由美さんは、実は女川町の生まれです。こけし工人である吉紀さんとの結婚を機に始めたそうです。そもそも、こけし作りには非



自作のこけしを持つ真由美さん

常に興味を持っていたそうです。「こけ女」という言葉があります。最近は、その愛くるしさや素朴な味わいに若い女性達の間でこけしブームが起こっています。様々な背景にこけしを入れて

インスタグラムにアップしたり、収集したり、自らこけし作りをしたりして凄いブームです。 真由美さんは、正に「コケ女」の先駆けだったのかもしれません。 こうして一人前の工人にまで自分が成長できたのは、「弥治郎集落が自分を暖かく受け入れてくれたお陰です。 競争心もあるけれど、工人同士がとても仲良くてね。」 真由美さんのこの言葉には、当時、自身がよそ者であり女性であることで大変辛い思いがあったものの、それを打ち消すほど周囲の寛容さに感謝していることが伝わってきました。

そんな真由美さんの轆轤作業を拝見させていただきました。いざ機械の前に座ると顔つきが 一変、機械(回転)に負けぬようしっかりと繋を固定させながら原木を削っていく姿は、正に



轆轤作業中の真由美さん

工人であり真剣そのものでした。女性ながらも、 轆轤を回し鑿を扱う腕や指先が実に逞しく見えま した。作業の中で一番気遣うことは、原木の乾 燥度合いによって鑿の刃の研ぎ具合、その調整が 必要であること、また、最後の仕上げ作業(研磨 に相当)に使うバンカキという特殊な工具の扱い が一番難しいとのこと、この作業は工程の中で最 も神経を集中して行うそうです。

作品に終わりはない、そして伝統…

真由美さんは子ども4人を育てながら、こけし作りをずっと続けてきました。こけしは人形であり玩具であり、子どもたちのためにおもちゃ作りをしているようなもの、そして今は孫もできたので、今度は彼らのために専念しているそうです。「こけしは人形です。お陰様で自分の作品を求めてくれるお客さんがいて、作品を可愛がっていただいてくれています。だから、嫁に出すよ

うな気持ちを込めて作っています。気持ちが 相当入り込みますので、自分の調子が悪いと、 こけしの表情にその気持ちが現れてしまいま す。こけしは一本一本の表情が全て違います。 最近は、お客さんからのリクエストが多く、オー ダーメイド作品が多くなりました。 それにしっ かりと応えていかなければなりません。」 例え



注文挽きの「えずこ」こけし色々

ば、新型コロナウイルス感染で疫病を収めると言われる妖怪「アマビエ」の注文が殺到しているそうです。専らお客さんからの注文を受けて製作する注文挽きによって、相手と直に会い、相手の顔を見て、相手の気持ちを汲んで作ることをモットーにしている真由美さんは、お客さんとのつながりを大切にしています。そして、自身もお客さんから様々なことを学ぶことが多いそうです。



注文が殺到している「アマビエ」





工房に飾られた作品の数々

30年近く続けていれば、技量もある程度は身につきますが、「これでもう終わり」ということはないそうです。「全日本こけしコンクールで最高の賞をいただきましたが、それで終わりません。」と、真由美さんは謙虚に言われました。「お客さんが求めているものを作って、それを受け取ったお客さんが喜んでくれることが何よりです。新しいこけしファンが増えていることも嬉しい限りです。そのきっかけが自分の作品であると、なおさら嬉しいです。若い世代の方々がこけしを受け入れてくれている。これまた嬉しいことです。」真由美さんに笑顔が絶えません。真由美さんには辛いことがないそうです。「この集落でこけし工人として仕事ができることが最良の喜びであり一番嬉しいこと、工人としてプレッシャーもありません。あとは物産展で全国を回れることも嬉しいかな。」それから思い出に残ることとして「フランス、パリのルーブル美術館で開催された国際手工芸大会に出品して製作実演したことかな。とっても反響がありました。フランス人にはこけしが好まれるのでしょうか。」国際的にもこけしが評価されたようです。「そんな流

れを私で終わらせてはいけない。これまで弥治郎の工人は私がずっと最年少でしたが、弟子も 出来たので、こけし作りは勿論、こけしの関心をさらに広めていってもらいたい。」真由美さんは、 しっかりと先を見据えていました。

そして今、真由美さんがめざしていることがあります。お客さんから代々引き継がれて持っている古い伝統こけしを真似て作ってくれないかとの注文を受けるそうです。その古き伝統こけしを模造することを「再現」といいます。それがどうしても「再現」できないというのです。真由美さんのご主人のようにもともとこの地(弥治郎)で代々受け継ぎながらこけし作りをしている工人は「再現」ができるそうですが、自身はその域に達していないといいます。技量面だけではなく、自身がよそ者(女川町出身)であることも影響しているのかもしれない、といいます。その伝統こけしを「再現」できるようになりたい。それほど、「伝統」とは真由美さんにとって重荷であり、そして重責なのかもしれません。



伝統こけしの原型

大切な色あいと落ち着く香り

こけしの原材料は専らミズキですが、最近はナシを使うそうです。ナシは材色が肌色で年輪が邪魔にならない点がとても良いそうです。ナシの原木は果樹園で使われなくなったものを譲り受けています。自然素材としての木材の白さを大切にしているそうです。「木を削っていると、とっても良い香りがします。木の種類によって香りも手触りも違います。香りのせいかもしれませんが、削っていると気持ちが落ち着きます。木は生きています。乾燥状態如何では、削っている最中に突然割れることもあります。」常に木の状態を見極めながら作品製作に臨んでいること



こけしの主たる材料・ミズキの原木



近年使用されているナシの原木

から、木の特徴を知り尽くしています。そして、真由美さんは子どもたちと木との関わりを語ってくれました。「子どもも孫も木製のオモチャ(こけし)で遊んできました。主人がコマ回しの名人であったこともあり、子どもたちも教えてもらったりしていました。だからなのでしょうか。ゲームをすることなく外で遊んでくれています。今や、木製玩具で遊べる子どもたちは一見贅沢なことかもしれませんね。子どもの頃にこけしで遊んだ体験をしたことで、大人になってこけし工人を目指す人もいますよ。」

次代へ伝えたい

「以前はミズキの原木がなかなか調達しにくい時期がありましたが、近所でスギの人工林が沢山伐採されているせいなのでしょうか。 その際に伐り出されたミズキを買ってくれないか



伝統を引き継ぐこけし



斬新なデザインの創作こけし

と言ってくる業者が増えているのが気になります。」森林が伐採されることに心が揺れ動いていました。子どもたちは生まれたときから山間に住み周囲に森林があって緑の香りを感じています。海育ち



こけし村のシンボルツリー・ミズキ

の私にはその香りがわかりませんでしたが、だんだんとその香りが わかるようになってきました。森林は子どもたちにはあって当たり前 ですが、私は森林の有り難さを実感しています。|

真由美さんは、自身の実体験から「子どもたちにもっと木(積み木)で遊んでもらいたい。こけしもただ飾るだけでなく玩具として手に取って戯れてもらいたい。」と言います。こけし工人ではなく、こけしを販売するこけし屋になりたい人もいるそうです。こけしが育んできた伝統をしっかり理解してもらって、その上で新作も扱ってもらいたい。挽き方から絵付けまでの一貫作業が出来る女性の工人(県内では5人ほど)も出てきましたが、是非長続きしてもらいたい。」そんな不安と期待を入り混ぜながら、最後に訴えかけてくれました。

4まか ふうけいでんびょう 山間の風景点描

田んぼとスギ木立



一見ありふれた風景ながら、青々とした 田んぼの先に手入れされたスギ木立とア カマツ林が、活き活きしていた。田んぼ には2羽のアオサギが餌をついばんでい た。生物多様性なり。

5. 木を見れる、木を使える

棟梁(大工職人) 佐藤 良昭さん

気仙大工は、日本の四大名工と言われ、その 歴史は江戸時代まで遡ることができます。東北の 気仙地方(岩手県の大船渡市、住田町、陸前高 田市、宮城県の気仙沼市の辺りで藩政期は伊達 領)に古くから伝わる、優れた技術を持つ大工 さんの集団であり、民家から堂宮、建具、細工も こなす多能な一団です。そんな気仙大工の流れを 汲む創業半世紀近い歴史ある工務店が、仙台市



社屋の外観

泉区の閑静な団地の一角にあります。その代表を務めているのが、棟梁の佐藤良昭さんです。 代々受け継いだ技と知恵で、森林の木々を上手に活かしてきた気仙大工は、適材適所に木材 を使いこなし、木々の特長を最大限に生かしながら伝統ある木造建築を手掛けてきました。そ の技法を持ち得た良昭さんに木への拘りなどを伺いました。

下積みから独立へ

自宅で寛いでいた良昭さんは、作業服の上着をさっと羽織りながら事務所へ案内していただきました。一工務店の経営者であり恰幅のいい豪放な方と思いきや、作業服の着こなしが粋で親しみのある穏やかで実直な方でした。気仙沼市の出身、正に気仙大工隆盛の地で生まれ育ちました。8人兄弟で男が3人、その次男ということで、4歳の時に父親が亡くなり、10代の頃から気仙大工の師匠の下、住み込みで仙台にて4年修業。「修業時代は実に辛かったよ。ずっと下っ端で、いろんなことをやらされたね。師匠



伝統の和を重んじる良昭さん

は厳しくてね。でも、それは暴力とかパワハラではないんだ。」この間、木造のみならずあらゆる建築に携わり、RC(鉄筋コンクリート)や型枠大工も造作工事もしたそうです。

その後、関西(京都)にも修業に行き、そこで木造建築に対する意識が変わりました。それは良昭さんにとってカルチャーショックでした。「関西人はね、ビジネスはマンションで行う、自宅は人を招くために自宅の建築に拘る。」そして和風建築の粋である数寄屋造りに傾倒していったそうです。一念発起して独立、昭和50年頃から数寄屋建築、茶室をはじめ寺社建築、文化財の修復なども手掛ける名うての棟梁として、腕利き職人を束ねながら現在に至っています。それも4年間の修業が大きな力になっていました。

クライアントがいてこそ良い仕事

良昭さんは営業をしないそうです。クライアント(建築を依頼する人)を待つ、これまで和風建築への拘りを求めて来るクライアントに恵まれたことで、良い仕事ができてきたこと、それが一番良かったそうです。「全てがうまくいったわけではない。成功と失敗の繰り返しだよ。エピソードはいっぱいだね。」長き経験を物語っています。そ



して、「クライアントに巡り会って仕事への意欲が掻き立てられる。」それがやり甲斐だそうです。 「家を持つとなると、往々にして一般のハウスメーカーに行ってしまうよ。だって価格が安いからね。 初期投資がネックになってしまう。例えば、クロス張りなどは一時はいいが、後々剥がれるしボロボロになる。」 当世の住宅事情にも言及されました。

拘りの木材

木材の話をされる良昭さんの目が一段と輝きを増してきました。開口一番「木はなんといっても体に良いね。」「木はね。日本の最たる一番の材料だよ。木と紙と土。これらは日本の気候風土に最適な自然素材だね。最高の調湿材料だ。湿潤な日本の気候では建物にとっての難敵は湿気によるカビの発生だよ。湿気



拘りの茶室にて

を吸収してそのカビを防いでくれる。」言葉に力が入りました。そして、部材の柱材には必ずヒノキの四つ割り正角に拘るそうです。スギについては木目が美しくて赤身(心材)に拘るそうで

す。「地元の木材を使いたいが、お目に敵った材がない。化粧材に使えるような丸太もないしね。供給元がなくてどうしても県外から取り寄せざるを得ない。強いて上げれば、南三陸スギは色が薄赤で良い材かな。」ヒノキは東濃檜(岐阜県東濃地方)や尾州檜(長野県木曽地方)、スギは秋田(天然スギ)のものを使うとのことで、県産材需要拡大にとっては手厳しい発言でした。

人にばかり(木への拘りを)言っているだけではなく、自身が自宅の建築で実践しているということで、事務所隣にある自宅を案内していただきました。玄関先から数寄屋の風情に圧倒されました。最もお気に入りだという茶室は、伝統と和が凝縮された造りです。「ここはネズコで、ここはアカマツで、ここは〇〇、ここは△△、…」様々な樹種の木が、時には丸太のままで時には化粧材で、樹皮や節といった木の持つ特徴を最大限に活かしながら随所に配置されていました。土壁には鉄粉を散らしているそうで、時間の経過によって錆が出てきて味わいが醸し出されるとのこと。確かに味わいのある土壁でした。正に侘と寂の世界です。床の間もシンプルながら洗練された意匠が随所に施されていました。



良昭さんのご自宅



ご自宅の玄関



ご自宅の床の間

次代へのメッセージ

良昭さんは歯がゆい思いで語ってくれました。「もっと我慢強くなってもらいたいね。長続きしないんだよね。うちに7社目だという社員がいたが、木を触らせてくれないから辞めてきたという。 親方自ら教育していかないと、伝統や技術が伝わっていかないね。木を見れる人、木を使える人、 木の特徴や性質をわかっている人が本当にいない。心配だね。専門学校や工業高校にも出向いて生徒に教えているが、大工の基本がわかっていない。木の種類、木の扱い方が全くわからないんだ。アルバイトでもいいから、インターン制度が必要だ。現場で実践してもらいたいね。県外にも助っ人で行くよ。山形には古民家修復で、岩手には茶室造りで出向く。茨城などにも行くよ。ハウスメーカーの施工しかできない地元の大工が、期限までに家を建てられなくなってしまい、手助けに行くこともある。子どもたちには、木工でもいいから是非木に触って木の良さを体感してもらいたいね。」言葉の先々には良昭さんの熱き思いが入り込んでいました。

棟梁の風格・知・技

後日あらためて、棟梁としての良昭さんの仕事場である自社工場に伺いました。既にスギ丸太柱の臍造りに専念されていて、そこにはもはや社長ではなく一棟梁として腕利き職人の姿がありました。聞き出す間もなく早速木への拘りについて再び語ってくれました。「角材は柾取り(芯抜き)の角材を使う。」割れや狂いをなくすことによって顧客からのクレームを回避するのだそ



臍造りに専念する良昭さん

うです。「羽柄材(木造住宅において構造材を補う材料や下地材。構造材と言われる土台・柱・ 梁・桁等の部材以外に使用する比較的断面の小さい部材)には、専らスギ材を使う。」以前 は、スギ材は材が柔らかくて釘抜けが多かったそうですが、最近はビス施工(ネジ)なので問

題が無くなったそうです。「外材のホワイトウッド(ドイツトウヒ、ヨーロッパトウヒ、ヨーロッパスプルースなどマツ科トウヒ属の常緑針葉樹)も柔らかくて釘抜けが多い。こうした外材は桁から上部の構造材に使うことが多い。」良昭さん一押しの部材を拝見させていただきました。トガサワラ(栂椹)の三尺もので、赤無地の木目が実に美しく、国産針葉樹ではレアものです。そして木曽ヒノキ。木曽五木でかつては幕府直営の留山にあった貴重な材です。外材にも良質のモノがあるといいます。その一つがラオスヒノキ(中国南部からインドシナ半島の北回帰線以南に分布)。実にきめ細やかな木目と黄色味を帯びた色合いが印象的でした。国産のヒノキではなかなか揃



いにくい細かな木目が多く含まれていることが特徴で、その をの細かさは木曾ヒノキに匹敵するといいます。そして アコヤ。 高耐久化天然木材で 40 年以上腐らないことから、専らデッキなどの外構材に使うそうです。こうした様々 な部材を工場にストックしていました。「いつ使うかわからない。 顧客からのリクエストやニーズに直ぐ応えなければいけない。 だからストックは大切なんだ。」といいます。「外材が必ずしも駄目だとは言えない。 適材適所を見極めて使えばいい。 無垢材に拘るのは長い目で見たときの木材の味わいである。 若い世代は集成材でも気にしない





墨付け作業中の良昭さん

し、単なる木材としか見ない。30年も経過すればその 欠点がわかるよ。」そして再び人材育成に話が移りました。「とにかくキャリアが大切だ。技を後継者へ伝える こと。その技が途絶えると顧客が来なくなってしまう。 折角の素晴らしい素材である木材の需要が減ってしま うよ。」24年良昭さんの下で勤めているという愛弟子 の笠原さんがいらっしゃったので、師匠について伺い

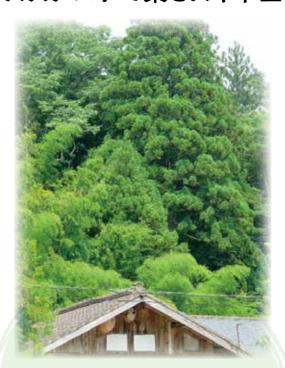
ました。「とにかく顧客に対して良いモノを造ろうとする姿勢が素晴らしいです。真摯に向き合う。木材のことを熟知してこそできることだと思います。見習うべき大切なことです。|

最後に大工職人として最も大切な七つ道具を拝見させてもらいました。愛弟子の笠原さんが間髪入れずに次々に道具を持ってきてくれます。曲尺(指矩)は尺ものとメートルものの二種類。長年馴染んで学んできた尺ものに拘るといいます。そして鑿セット。丸鑿と角鑿がそれぞれハードケースにずらり。鋸も鉋も様々な部材や場面で使い分ける何種類ものタイプが勢揃い。そして年季の入った墨壺。師匠と弟子の阿吽の呼吸、若き職人と熟練職人との共演を垣間見ました。最後に「いつまでも現役で顧客のために頑張るよ。」血気盛んな良昭さんの言葉に元気をいただきました。



中ま あい ふうけいてんびょう 山間の風景点描

スズメバチの巣とスギ木立



古い民家の軒下に大きなスズメバチの巣 を見かけた。ハチの巣は縁起が良い。子 孫繁栄、千客万来に商売繁盛。巣が新 たに作られている。背後の大きなスギ木 立も果たして守り神か。

◆掲載内容に関する留意事項

- ・掲載内容については、本人の了解を得ているほか、事前の校閲をいただい ています。
- ・ 園児の人物画像が掲載されていますが、該当する園児が在席する幼稚園 を通して、園児の保護者にも趣旨をお伝えいただき、了解を得ています。
- ・一部の画像については、本人の了解を得て本人が管理するHPなどより転載しています。



取材を終えて ~フェイス トウ フェイス~

新型コロナウイルスの感染拡大がとどまることを知りません。世界中が平等にコロナ禍に見舞われているので、我が国だけが終息しても、安閑としていられるものではありません。あらゆる社会活動に制約がつきまとい、かつての当たり前の生活が本当に羨ましい、マスクを身につける必要が無い日を待ち焦がれている昨今です。コロナ禍の時勢、オンライン会議やらオンライン授業やらカメラとイヤホンで画面と睨めっこ。果たして、気持ちとか熱意とか感動とか、人から伝わる温もりは感じられるのでしょうか。

そのような中、木に関わりのある職人肌の方々とお会いする機会を得ることができました。 面識のない初対面の方もいれば、過去に仕事の関係でお会いしてから、何年ぶりに再会する方 もいらっしゃいました。お会いする際には、勿論、事前に検温するなどして体調に異常なしを 確認し、マスクを着用して消毒してからの取材になります。先方にも消毒液が用意されているこ ともありました。そして、ソーシャルディスタンスを確保して、極力相手と近づかないように気遣 いながらの取材となります。それでも、直々にお会いできることの嬉しさ一入です。初対面でも、 取材を進めていくうちに段々とお互いの心が通じ合って、職人気質の熱き思いや自身の苦労話、 カミングアウトすることも、そして涙ながらに思い出を語ることもありました、やはり「フェイス トウ フェイス」は熱が伝わってきます。そんな当たり前のことに喜びを覚えるのはコロナ禍の所 為かもしれません。ご多忙の中、取材に快く応じていただきました職人の皆様に深甚なる感謝 を申し上げます。

なお、この「木育」に関する取組は、宮城県の「木の香るおもてなし普及促進事業(木育活動)」 を活用いたしました。

宮城県林業振興協会事務局



木になる職人を求めて 次なる旅へ…





編集·発行: **宮城県林業振興協会**

(公益社団法人 宮城県緑化推進委員会内)

〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17 宮城県仙台合同庁舎10階

TEL 022-301-7501 FAX 022-301-7502 E-mail:miyagi@ringyou-fukyu.net